

博士論文の要旨および 論文審査結果

氏 名	取屋淳子
学 位 の 種 類	博士（比較文化学）
学 位 記 番 号	文博甲第3号
学位授与の日付	2006年9月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目	宮崎アニメのグローバル化 ——アメリカと台湾における受容の比較研究——
論 文 審 査 委 員	主査 小池 誠 教授 副査 P.Billingsley 教授 副査 藤森かよ子 教授

<博士論文の要旨>

宮崎アニメのグローバル化 ——アメリカと台湾における受容の比較研究——

取 屋 淳 子

本論文では、「宮崎アニメのグローバル化」をテーマに論じている。日本の映画としては異例の300億円を超える興行成績を記録した宮崎駿監督

の『千と千尋の神隠し』(2001年)と、その大ヒットの布石ともなった同監督の『もののけ姫』(1997年)を取り上げ、この2作品が日本、アメリカ、台湾で、それぞれどう受け入れられたのかを分析している。この日本を舞台にした2作品を取り上げ、それぞれ日本での反応とアメリカ、台湾での反応を比較することで、各国における受容の違いの文化的背景を比較文化の観点から検証した。

序論ではまず、この論文の目的、そして「宮崎アニメのグローバル化」という本論文のテーマを取り上げる意義について述べている。第2節では、アニメ研究の三つのアプローチ、①〈内容分析〉、②〈経済学的分析〉、③〈社会学的分析〉をあげ、本論文の研究の意義について述べている。そして、第3節では、比較文化という観点から、三つを比較する利点について述べている。すなわち、二つの国の比較ではなく、日本、アメリカ、台湾と三つの国を比較することで、日本における作品の受容も含めて相対化させて捉えることができることを述べている。

第1章第1節では、世界で観られるようになった日本のアニメがどういう発展を遂げてきたのかを述べている。これまでの日本アニメが歩んできた歴史を、①〈戦前の短編漫画映画〉、②〈戦後のアニメ発達の基礎固め〉、③〈テレビアニメの隆盛〉、そして④〈大衆化した日本アニメ〉の四つに分類し、現在の日本アニメの発展を担ってきたそれぞれの要素について言及している。ディズニー・アニメが、フルアニメーションという方法で、より本物に近づくことに重きをおき技術面を高めたのに対して、日本アニメは予算不足などの理由から、かなりの省力化を強いられて制作されていた。しかし、結果的にそれがリミティッド・アニメーションという日本独自の技術を生み出し、そして手塚治虫の『鉄腕アトム』からの流れを汲むテレビアニメと長編アニメ映画の二つの流れとなり、現在に至っているのである。第2節では、アニメブームを巻き起こした④〈大衆化した日本

アニメ〉の中心的役割を果たした宮崎駿監督の生い立ちから、これまで手がけた作品について言及し、今の日本アニメ界を引っ張っているスタジオジブリ設立に至る経緯を詳しく述べている。そして、大記録を樹立した『千と千尋の神隠し』に至るまでの、宮崎駿が作品を制作するにあたって、どのような考えを持ち、その考えをどのように作品に反映させているのかをインタビューなどの発言などから分析している。年齢層を限定せず、メッセージ色を強めず、親が安心して子供に観せられる作品、そして大人が観ても楽しめる作品を制作した宮崎駿のアニメ界への功績は大きい。作品の中で明確なメッセージを出すのではなく、受け取る側である観客にある程度の解釈を委ねることで、幅広い年齢層に支持されていることが分かった。宮崎駿自身の信念として、日本人の自然観を形成している〈照葉樹林文化〉というキーワードがあり、それが作品を観る側に、「懐かしさ」や「自然の美しさ」を喚起するものへとつながっているのである。

第2章では、『もののけ姫』と『千と千尋の神隠し』が台湾とアメリカでどう受け取られているかを分析する前に、それぞれの国の文化的背景を詳しく述べている。まず第1節で、日本アニメが世界規模で観られている現在の状況を詳しく紹介し、Japanimationと呼ばれていた時代から、広くANIMEとして世界で受け入れられるようになった経緯を述べている。第2節で取り上げたアメリカは、ディズニー・アニメが世界のアニメの第一線を走っていることもあり、すでにディズニー・スタンダードという確固たる基準が存在する。それが、「勸善懲悪である」、「リズムカルなテンポ」、「ハッピーエンド」、「コミカルな場面・脇役」、そして「ミュージカルである」の五つである。これらのディズニー・スタンダードは、アメリカのアニメを語る上で欠かせない基準であり、ディズニー・アニメに限らずテレビアニメに関しても、この基準が守られているのである。そして、もう一つ、ディズニー・アニメを始めとする映画制作で配慮されているのが、

レイティング・システムである。年齢別で五つに分けられており、それを元にアメリカの観客は映画を鑑賞しているのである。そして、その中でもG指定という年齢制限なく観ることができるレイティングであるのが、ディズニー・アニメであり、アニメでこのG指定でないものは、なかなか受け入れられるのが難しいことが分かる。そして、これらの背景には、アメリカ人の子供観などが反映されているのである。

第3節では、台湾の事情として、まず哈日族現象がどのように起き、どういった理由で社会現象まで引き起こすことになったのかを述べている。哈日族現象は、ここ最近で突然始まった現象ではなく、ケーブルテレビが合法化される前から、日本ブームというのは潜在的にあった。それが、ケーブルテレビで自由に日本のドラマを観れるようになったことで、一気に広がったと考えられる。哈日族現象の中心は、日本のトレンドドラマ人気であり、10代、20代の若者が憧れる要素を全て満たしていたことから人気に火がついたのである。しかし、あまりにも熱狂的な現象のため、台湾でも揶揄されることが多い。台湾での日本人気の原因を探ると、日台関係の過去の歴史や、日本のポピュラー文化の台頭など様々な要素が絡み合い、「グローバル化の中での一種の混合現象」によってできたものであることが分かった。その哈日族現象の中で、まだまだ日本アニメについての言及は少ない。しかし、アンケート調査の結果から、台湾での日本アニメの定着度はかなり高いと考えられる。特に今回アンケート調査に応じてもらった10代後半から20代前半の人たちは、小さい頃から、特に日本アニメと意識することなくテレビアニメなどを観て育ってきた世代である。だから、異国のアニメではあっても、日本アニメを違和感なく観ることができるようになったのである。

第3章では、『もののけ姫』や『千と千尋の神隠し』以前の宮崎作品が、アメリカや台湾でどのように評価されていたのかを取り上げている。第1

節では、アメリカ、台湾以外の国で宮崎駿の知名度ともに、宮崎作品がどのように評価されているのかについて述べている。現在では、ディズニー社との提携などにより、アメリカをはじめ、高い評価を得ている宮崎アニメであるが、最初から高い評価を得ていたわけではなかった。フランスなどでは、その芸術性から日本映画と同等に評価されていたが、アメリカではディズニー・アニメがあったため、ほとんど評価されていなかった。そこで、第2節では、過去に翻訳版が発売された『風の谷のナウシカ』を取り上げ、比較している。『風の谷のナウシカ』の翻訳版である“Warriors of the Wind”は、20分ものカットで、オリジナル版が持つ「人間と自然との関わり」といったシーンなどを完全に排除し、オリジナル版とは全く異なるSF作品に作り変えてしまったのである。それはビデオパッケージからも明らかで、一目でオリジナル版の『風の谷のナウシカ』とは異なることが分かるように作られていた。それ以降、10年間は全米規模で宮崎アニメが公開されることはなかった。しかし、第3節で取り上げた『となりのトトロ』は、アメリカでもG指定となり、ビデオが発売され人気が高かった。理由としてあげられるのは、ディズニー・スタンダードの「ハッピーエンド」という基準を満たしている点、そしてリアリズムの追求、ファンタジーの要素といった特徴をそなえていることで、アメリカでは受け入れられた。同じく台湾でも、この『となりのトトロ』は宮崎アニメの中でも1番人気が高い作品である。それは、作品のキャラクター性、特にトトロの「可愛さ」が台湾では受けたからである。加えて『となりのトトロ』の中国語タイトルに「龍」という幸運のシンボルを使い、『龍猫』としたことにより、作品の神秘性が増し、人気の作品となったとも考えられる。同じ日本を舞台とした宮崎アニメでも、それぞれの受け入れられ方が違うことが分かった。それぞれの土壌が異なっているが、『となりのトトロ』はアメリカ、台湾ともに人気のある作品となっている。

第4章では、1997年に日本で公開され、映画興行成績を塗り替え話題となった『もののけ姫』を取り上げ、まず日本での評価について述べている。まず第1節では、制作者である宮崎駿がどのような思いから『もののけ姫』を制作したのかについて述べている。『もののけ姫』は、それまでの宮崎アニメとは異なった宣伝方法がとられ、荒々しいイメージを前面に押し出すことで、「自然に優しいジブリアニメ」のイメージを払拭する作品となったことについて述べている。第2節の内容分析で述べているように、宮崎駿の想いが、今まで以上に色濃く出た作品となったのである。それは第1章3節でも述べているように、ここへきて、日本人の自然観であると宮崎駿自身が信じている〈照葉樹林文化〉を出さなければいけない、日本人に自分たちのこういった自然観を思い出してもらいたい、という強い信念があったからである。第3節で述べているように、異例の大ヒットとなった『もののけ姫』であるが、物語のラストがすっきり終わっていないという点や、あまりにもたくさんの世界観が詰め込まれすぎて分からなかったなど、ラストシーンを含む物語全体の設定についてなど、様々な批評がなされた。しかし、映画の宣伝コピーに「生きろ。」とあり、「本来、人間が背負っていかなければいけない問題に、正面から向き合った作品」と歴史学者が評価しているように、宮崎駿の並々ならぬ熱意が観客に伝わった結果、日本では異例の大ヒットを記録したといえる。そして、この作品で「人間が本来持っている生への執着」という人間のありようを描き、それが次の『千と千尋の神隠し』へとつながっていったのである。

第5章では、日本で賛否両論あったにもかかわらず、大ヒットとなった『もののけ姫』が“Princess Mononoke”,そして『魔法公主』となり、アメリカと台湾ではどのように受け取られたかについて、詳しく述べている。まず第1節では、『もののけ姫』がアメリカ、台湾以外でどのように評価されたかについて述べている。宮崎アニメの芸術性が高く評価されている

フランスでは、オリジナル版の良さを大事にしつつ、ディズニー・アニメとは異なるということを前面に出して成功した。しかし第2節で取り上げたアメリカでは、ディズニー・スタンダードやレーティングの壁に阻まれ、ジブリ側の要求をのんでノーカットとしたが、興行成績は伸びなかった。アメリカの批評家や、アニメーターたちからは高い評価を得た“Princess Mononoke”であったが、やはり、暴力的なシーンがあったことと、ディズニー・スタンダードの「勸善懲惡」と「ハッピーエンド」という基準に沿わないということが1番の原因となり、成功しなかったのである。一方、第3節で取り上げた台湾では、『魔法公主』として公開されたが、興行成績としてはそれほど振るわなかった。インタビュー調査から分かるように、それぞれが物語の内容は難解であったとしながらも、それぞれがメッセージを受け取り、理解していた。物語のラストシーンでも、曖昧に終わったが「最後に希望が持てる終わり方であった」と評価している。

アメリカと台湾でも、同様に興行的には振るわなかった。ただし、それぞれの文化的背景の差異があったことで、受け入れられ方が異なったのである。まず、アメリカの一般の観客が、『もののけ姫』が異国のアニメであることにまず違和感を持ってしまい、加えてディズニー・スタンダードとかけ離れていたことで結果的に受け入れられなかった。対して台湾では、内容が難解だった、好きなキャラクターもいなかったなどの感想が出たものの、それなりの解釈が出たことは、物語をある程度理解したと判断できる。

続いて、日本で新記録を樹立した『千と千尋の神隠し』を取り上げ、6章では日本での評価、7章ではアメリカでの評価、8章では台湾での評価と、それぞれ三つ国での受け入れられ方を詳細に分析している。第6章第1節では、日本で『もののけ姫』からの流れがあり、宮崎の知名度も手伝って、公開前からかなり期待されていたことについて述べている。第2節

で述べているように、『もののけ姫』とは異なった評価がされた理由として、物語自体の内容がまずあげられる。この『千と千尋の神隠し』には、「リアリティーがあり、親近感が持てる」、「内容が分かりやすい」、そして「ハッピーエンド」といった要因があり、大ヒットへとつながった。そして、第3節で述べているように、他にも大ヒットの要因として、主人公の千尋が10歳と設定されていたこと、湯屋を中心とした異界を描いていること、そして起承転結ではなかったことの三つをあげることができる。年齢設定を10歳としたことによって、それぞれの批評にあるように、思春期前の微妙な時期を表現することができ、観客はこれまでの宮崎作品よりも、より実体験として作品を観ることができた。そして、神様が風呂屋に疲れを癒しに来るという設定で湯屋の建物群のけげげげさを表現し、それが異界だとはっきり分からせ、その異界での千尋の存在を際立たせる役割を果たした。三つ目は、物語の中で、はっきりと異界が現実是否存在するか、千尋は成長したのかということには一切触れていないということである。しかし、起承転結をはっきりさせなかったことで、より観客が自分なりの解釈ができ、それぞれの解釈で観ることができた。

第7章第1節で取り上げたアメリカで“Spirited Away”として公開された『千と千尋の神隠し』は、前作の“Princess Mononoke”とは異なり、ディズニー社が直接配給した。しかし、一連のディズニー・アニメとの違いを出すという宣伝方法が取られ、短期間に一気に公開してしまうのではなく、あくまでも宮崎アニメというオリジナル性を前面に打ち出して公開された。『もののけ姫』と同じように、レイティングでPGがついたにもかかわらず、全米批評家賞などを受賞し、最終的にアカデミー賞アニメーション部門賞に輝いたのである。第1節で述べているように、“Spirited Away”が成功した理由として、オリジナル版をどのように解釈したかが分かる翻訳があげられる。①日本的なものをアメリカ人に理解させるため

に説明的になった部分、②オリジナル版にはない、新たな解釈が加わっている部分、そして③意図的に成長物語としてはっきりさせるために追加した部分である。この中でも③は、オリジナル版のラストにセリフを追加したことによって、物語全体の解釈が変わってしまった部分である。物語の最後に、千尋自身の、“I think I can handle it.”（うまくやっていけると思う）というセリフが追加されたことで、オリジナル版には明示されていなかった「主人公の成長」といった要素がはっきりと出されたのである。第2節では、『千と千尋の神隠し』が“Spirited Away”として公開された作品をアメリカの観客がどう観たのかを分析している。一般の観客もプロである専門家や批評家の人たち同様、ディズニー・アニメなどと比較して、それぞれが感じたことを率直に述べている。コメントの数も“Princess Mononoke”より多く、“Pokemon”が「楽しかった」や「面白かった」とコメントしているのに比べて、“Spirited Away”では、作品自体をより深く理解し、それぞれの感想を述べているものが多かったのである。そしてコメントの中には、“Spirited Away”が成長物語となったことで、アメリカで有名な『オズの魔法使い』や『不思議の国のアリス』と通じるものがあるとされ、第3節で述べたように、確かに細かい点では異なったところが多い作品であるが、物語の普遍性という共通点により、アメリカの観客は、“Spirited Away”という物語の世界がより理解し易くなったのである。

一方、第8章で取り上げた台湾でも、この『千と千尋の神隠し』は前作の『もののけ姫』とは異なった評価がされている。まず、第1節で述べているように、台湾版のタイトルが『神隠少女』になったことや、DVDのパッケージからも分かるように、アメリカのディズニー版とは異なり、オリジナル版がかなり尊重されたものになっている。それは第2節で述べた翻訳でも同様で、セリフの追加などは一切なかった。しかし、『もののけ姫』より評価が高かったのは、やはり第3節で述べているとおり、『とな

りのトトロ』との共通点が多かったことがあげられる。主人公の年齢や、異界を描いていること、そして何よりも、キャラクターそれぞれが可愛く、楽しめる作品となっていることが評価された理由であると考えられる。

「宮崎アニメのグローバル化」として2作品を中心に比較文化の観点から分析しているが、それぞれ受け入れる側の土壌によって、作品の評価が左右され、受け入れられ方が大きく異なるということが分かった。そして同じ映像であっても、もともとの受け入れる側の土壌に加えて、追加される翻訳などにより、作品の理解の程度も異なってくる。つまり、グローバル化されたものを、それぞれの国でローカル化する場合、文化の優劣などは関係がなく、どこまで自国の文化との類似性を見い出せるかによって、理解の程度が異なってくるのではないか。グローバル化されたものを受け入れるとき、つまりローカル化される時には、必ず違和感が持たれる。しかし、その違和感の中に少しでも共感できる要素を含んでいれば、作品を理解しやすくなるであろうし、その共感できる部分が、決して揺るがない物語の核の部分であれば、それによる語らせる力も出てくるのである。

今回取り上げた2作品がグローバル化するにあたって、我々オリジナル版を観た日本人にとっては、ディズニーが行なったセリフの追加などで、観客の解釈に委ねるといような柔軟な姿勢といった、失われてしまったマイナスの部分もあったが、言い換えれば、そういったセリフの追加が、より理解を深めたともいえる。つまり、一つの作品が世界という舞台上に上がりグローバル化されると、それぞれ受け取る側は、自分たちの文化と照らし合わせることにより、多少違和感を感じつつも、共感できる部分を探し出すことによって、ローカル化がなし得ると考えられる。「共感」を持てるか持てないかで、その国の受容のされ方が大きく変わってくるのである。そして何よりも大きいのは、宮崎アニメ、特に『千と千尋の神隠し』という物語が持つ魅力があったということがあげられる。日本での強い共

博士論文の要旨および論文審査結果

感，そして違和感があったにしろ，共感の入口に立つことができたアメリカ，物語そのものを深く理解した台湾と，それぞれの国で物語に対する共感に差こそあれ，理解されたということは，作品そのものに魅力があり，観た人を引きつけるものがあったからであろう。それが物語に対する共感へとつながり，呼び起こすものとなり，語らせる力となったのである。つまり，作品自体にグローバル化する力があったといえるのである。

“The Globalization of ‘Miyazaki Anime’: A Comparative Study of the United States and Taiwan”

Junko TORIYA

In this study of the globalization of “Miyazaki Anime”, I focus on Miyazaki Hayao’s twin masterpieces “Spirited Away” (『千と千尋の神隠し』; 2001), which achieved astonishing box-office returns of more than 30 billion yen, and “Princess Mononoke” (『もののけ姫』; 1997), which was also a top box-office hit in Japan and became the first of Miyazaki’s works to become widely popular outside Japan. The core of the study is a comparative analysis of how the two works, both of which were set in Japan, were received in three different cultures: Japan, the USA, and Taiwan.

Using a comparative-culture viewpoint to investigate the true nature of what is called the “globalization of Miyazaki Anime”, the research indicated that the reception of the two movies was strongly influenced by cultural traits in the three cultures examined. Moreover, it was found that the degree and nature of understanding of a work outside its native culture tended to be strongly affected by things like editing and translation, resulting in images that sometimes seemed quite different from the original. In other words, “globalization” went hand in hand with “localization”, and the degree of understanding of a particular work differed according to how closely it approached local cultural norms. Although it is natural to feel distant from a work originating in another culture, if the work can be made to include even a small number of elements with which local people can empathize even while they find other elements incongruous, it will help them to understand that work. When the element they empathize with is the core of the story, the work gains the

power of speaking to those people as strongly as it spoke to the people in the original culture.

Japanese people familiar with Miyazaki's works and with Miyazaki's policy of allowing audiences to make their own conclusions about the "meaning" of a particular movie may regret the changes brought by such things as the addition of extra lines and the culturally-influenced translation introduced by Disney, the distributors of his movies in the USA. On the other hand, whatever was lost from the original as a result of such changes it can also be argued that they resulted in a deeper understanding of the movies outside Japan, and Miyazaki himself seems to have concurred in this view. This is because audiences of a particular movie originating in a culture that is not their own will instinctively seek elements that concur with their own cultural understanding. To the degree that they find such elements, even if they continue to experience some elements of "strangeness", the movie will be a success, and can then be said to have been successfully "localized", which is to say "globalized".

The study found that, because of historical and geographical factors, the degree of understanding of and empathy with Miyazaki's movies tended to be stronger in Taiwan than in the USA, particularly in the case of "Spirited Away". For Japanese audiences, Miyazaki's movies have a timeless quality that resulted in their becoming such monster hits. Although, commercially speaking they did not have the same success outside Japan, receipt of the Academy Award for animation together with the high critical acclaim the movie enjoyed in both cultures (as well as in the rest of the world) indicates that Miyazaki's movies successfully navigated the process of "globalization"/"localization", and became movies that could be enjoyed on the world stage.

＜博士論文審査結果の報告＞

論文提出者：文学研究科博士後期課程02D4101 取屋淳子

論文題目：「宮崎アニメのグローバル化

——アメリカと台湾における受容の比較研究」

I 論文の要旨

1. 論文の課題

学位申請論文「宮崎アニメのグローバル化——アメリカと台湾における受容の比較研究」において、学位申請者である取屋淳子氏（以下、著者とする）は、世界的に有名なアニメ映画監督である宮崎駿の『もののけ姫』（1997年）と『千と千尋の神隠し』（2001年）を取り上げ、この二作品が日本・アメリカ・台湾において、それぞれどのように受容されたか、比較文化の観点から論じている。著者が調査（インターネットによる資料収集と台湾における実地調査）で得た資料にもとづいて、日本を舞台とした両作品の、日本における反応と、アメリカおよび台湾における反応を比較し、それぞれの地域における受容の違いと、その文化的背景を分析している。また、二作品の受容の比較に際しては、それぞれの対象地域における専門家や批評家の人たちと、一般の観客との反応はどう異なるのかという点も考慮し、幅広い視野から分析を試みている。

日本の大衆文化のグローバル化に関する研究は、アジアだけでなく欧米も含めて世界の様々な地域で日本のマンガ・アニメ・テレビドラマが好まれ、また批評の対象となっている現状に比して、まだまだ十分に研究が進められていない分野である。日本の研究者としては、岩渕功一氏がテレビドラマのアジアにおける流通に関して先駆的な研究を発表しているが、日本発の大衆文化のなかで最も脚光を浴びているアニメの海外における受容

博士論文の要旨および論文審査結果

に関して、学問的な研究はまだ殆んど発表されていない。著者のアニメの受容に関する研究は、社会学、カルチュラル・スタディーズ、文学批評、文化人類学など既存の学問の枠組みを超え、新しい研究領域に挑んだ大胆な試みである。著者は、アニメのなかでも宮崎駿監督の作品を取り上げ、アメリカと台湾におけるその受容について、本学大学院博士課程に在学中、実地調査も含めて様々な角度から取り組み、その研究の成果を今回、課程博士号の学位申請論文として提出した。

2. 論文の構成

序 論 日本アニメの比較文化論

第1章 宮崎駿と日本アニメの歴史

第2章 アメリカと台湾における日本アニメ

第3章 宮崎作品の海外評価

第4章 『もののけ姫』とその評価の多様性

第5章 『もののけ姫』海外での反応——送り手と受け手のギャップ

第6章 『千と千尋の神隠し』の成功

第7章 アメリカ人が観た“Spirited Away”

第8章 意識されない日本——台湾における『千と千尋の神隠し』

結 論

なお、上記の本文に加えて、参考文献と資料がつき、全175頁（1頁に1200字）になっている。

3. 論文の内容

序論では、この論文の目的、そして「日本アニメのグローバル化」という本論文のテーマを取り上げる意義について明らかにしている。第2節では、アニメ研究に関する先行研究を紹介し、本論文の独自性を明確にして

いる。第3節では、比較文化という観点から、三つの地域を比較する利点について述べている。すなわち、単に二者の比較ではなく、日本・アメリカ・台湾と三つの対象を比較することで（三点測量）、日本における作品の受容も含めて相対化して捉えることができると述べている。

第1章では、宮崎駿監督を中心に、日本アニメの歴史を整理している。第1節では、世界で脚光を浴びるようになった日本のアニメがどういう発展を遂げてきたのかをまとめている。第2節では、宮崎駿監督の生い立ちから、これまで手がけた作品について言及し、今の日本アニメ界を引っ張っているスタジオジブリ設立に至る経緯を詳述している。第3節では、宮崎監督のアニメ制作に関する考えをインタビュー記事などの発言から分析を試みている。

第2章では、『もののけ姫』と『千と千尋の神隠し』が台湾とアメリカでどう受け取られているかを分析する前に、それぞれの国の文化的背景をまとめている。第1節で、日本アニメが世界規模で観られている現在の状況を詳しく紹介し、Japanimationと呼ばれていた時代から、広く ANIME として世界中で受け入れられるようになった経緯を整理している。第2節では、ディズニー・アニメが世界のアニメの第一線を走っていることもあり、ディズニー・スタンダードという確固たる基準が存在するアメリカの文化的背景についてまとめている。これはアメリカのアニメを語る上で欠かせない基準であり、ディズニー・アニメに限らずテレビ・アニメに関しても、この基準が守られている。もう一つ重要なものが、レイティング・システムである。年齢制限なく観ることができるG指定以外の作品は、アメリカの観客に受け入れられるのは難しい。第3節では、台湾の特殊事情として、まず「哈日族（日本の大衆文化を好む若者）」という現象がどのように起きたかを整理している。これは日台関係の過去の歴史や、日本のポピュラー文化の台頭など様々な要素が絡みあった複雑な現象である。また、

アンケート調査の結果から、日本アニメ、特に宮崎アニメの定着度はかなり高いことを明らかにしている。10代後半から20代前半の若者は、小さい頃から日本のテレビ・アニメを観て育ってきた世代であり、日本アニメを違和感なく観ている。

第3章では、『もののけ姫』や『千と千尋の神隠し』以前の宮崎作品が、世界でどのように評価されていたのかを明らかにしている。第1節では、アメリカ、台湾以外で、宮崎作品がどのように評価されているのかについて述べている。第2節では、アメリカで過去に翻訳版が発売された『風の谷のナウシカ』を取り上げ、オリジナル版と翻訳版を比較している。『風の谷のナウシカ』の翻訳版である“Warriors of the Wind”は、20分ものカットで、オリジナル版が持つ「人間と自然との関わり」といったシーンなどを完全に排除され、オリジナル版とは全く異なるSF作品に変わっている。宮崎監督の意向で、その後10年間は全米規模で宮崎アニメが公開されることはなかった。しかし、第3節で取り上げた『となりのトトロ』は、アメリカでもG指定となり、ビデオが発売され人気が高かった。理由としてあげられるのは、おもにディズニー・スタンダードの「ハッピーエンド」という基準を満たしている点で、アメリカでは受け入れられたと考えている。台湾でも、『となりのトトロ』は、トトロというキャラクターの魅力もあり、宮崎アニメの中でも最も人気が高い作品となっている。

第4章では、1997年に日本で公開され、映画興行成績を塗り替え話題となった『もののけ姫』を取り上げ、まず日本における評価についてまとめている。第1節では、制作者である宮崎駿がどのような制作意図を持って、『もののけ姫』を発表したかについて述べている。第2節で試みている作品内容分析で明かなように、宮崎駿の思いが、今まで以上に色濃く出た作品となっている。特に日本人の自然観であると宮崎駿自身が信じている「照葉樹林文化」を前面に打ち出した作品となっている。第3節では、こ

の作品に対する様々な批評を紹介した後、この作品で「人間が本来持っている生への執着」という人間の有り様を描き、それが次作『千と千尋の神隠し』へと繋がったと述べている。

第5章では、日本で大ヒットとした『もののけ姫』がアメリカで“Princess Mononoke”，そして台湾で『魔法公主』という題名で上映され、どのように受け取られたかについて、詳しく述べている。第1節では、『もののけ姫』がアメリカと台湾以外でどのように評価されたかについて整理している。第2節で取り上げたアメリカでは、ディズニー・スタンダードやレイティングの壁に阻まれ、ジブリ側の要求をのんでノーカットとしたが、興行成績は伸びなかった。アメリカの批評家やアニメーターからは高い評価を得たが、やはり、暴力的なシーンがあったことと、ディズニー・スタンダードの「勧善懲悪」と「ハッピーエンド」という基準に沿わないということが一番の原因となり、成功しなかったと述べている。一方、第3節で取り上げた台湾でも興行成績としてはそれほど振るわなかった。とはいえ、アメリカと台湾でも、興行的には振るわなかったが、それぞれの文化的背景の差異があったことで、受け入れられ方は異なっていた。アメリカの一般の観客は、『もののけ姫』が異国のアニメであることにまず違和感を持ち、加えてディズニー・スタンダードとかけ離れていたことで受け入れなかった。それに対して台湾では、インタビュー調査が明らかにしているように、内容が難解だった、好きなキャラクターもいなかったなどの感想が出たものの、作品の内容に関するそれなりの解釈が出たことは、台湾の観客は物語の内容をある程度理解できたと著者は評価している。

続く3つの章では、日本で新記録を樹立した『千と千尋の神隠し』を取り上げている。第6章では日本での評価、第7章ではアメリカでの評価、第8章では台湾での評価と、それぞれの受け入れられ方の違いを詳細に分析している。第6章の第1節では、日本では『もののけ姫』からの流れが

あり、また宮崎監督の知名度もあり、公開前からかなり期待されていたことが大ヒットにつながったと述べている。第2節で作品の内容分析を試み、『千と千尋の神隠し』には、「リアリティーがあり、親近感が持てる」、「内容が分かりやすい」、そして「ハッピーエンド」といった要因があり、大ヒットへと繋がったことを明らかにしている。第3節では、この作品に対する様々な批評を紹介し、他にもヒットの要因として、主人公の千尋が10歳だと設定されていたこと、湯屋を中心とした異界を描いていること、そして起承転結ではなかったことの三つがあると述べている。

第7章第1節では、『千と千尋の神隠し』がアメリカで、“Spirited Away”というタイトルで公開された時、どのように変わったかまとめている。映像はノーカットで上映されたが、英語の吹き替えによって、ディズニー側の解釈が加わり、オリジナル版とは異なる作品となっている。日本的なものをアメリカ人に理解させるために説明的になっただけでなく、この作品を「成長物語」とするためにオリジナルにはないセリフを追加した部分があることを指摘している。これは、主人公である千尋が成長したかどうかを第一の主題として前面に出していない宮崎監督の制作意図とは全く異なることである。第2節では、アメリカの批評家の間では高く評価され、全米批評家賞などを受賞し、最終的にアカデミー賞アニメーション部門賞に輝いたが、アメリカで公開された他のアニメ映画と比べて、興行成績という点では失敗に終わったと述べている。しかしながら、一般の観客がインターネットに寄せたコメントに注目し、アメリカで有名な『オズの魔法使い』と『不思議の国のアリス』を例に出しながら、観客がこの作品の世界をそれなりに読み解いていることを明らかにしている。興行成績では“Spirited Away”をはるかに上回った日本のアニメ“Pokemon”と比べて、その受容の広がりと深さは全く異なるのである。

第8章では、台湾でも『千と千尋の神隠し』は前作の『もののけ姫』と

は異なった評価がされたことを明らかにしている。第1節では、台湾版のタイトルが『神隠少女』になったことや、DVDのパッケージからも分かるように、アメリカのディズニー版とは異なり、オリジナル版がかなり尊重されたと述べている。第2節では、台湾版のテキストを仔細に分析している。翻訳の点でもセリフの追加などは一切なかったことを明らかにしている。第3節では、『もののけ姫』より評価が高かったと理由として、『となりのトトロ』との共通点が多かったことが挙げられている。主人公の年齢や、異界を描いていること、そして何よりも、キャラクターそれぞれが可愛く、楽しめる作品となっていることが台湾で評価された理由であると考えている。インタビュー調査の結果から、アメリカのようにセリフの追加などがなくても、台湾の観客は、成長物語としてこの作品を捉えている。日本ほどの共感を得てはいないが、物語自体の魅力を理解していると述べている。

結論では、各章の内容を要約した後で、日本とアメリカ、台湾における『もののけ姫』と『千と千尋の神隠し』の受容の違いを比較文化という観点からまとめている。それぞれ受け入れる側の文化的背景によって、作品の評価が左右され、受け入れられ方が大きく異なる。同じ映像であっても、吹き替えの翻訳などにより、作品の理解の程度も異なってくる。それぞれの国でローカル化する場合、自国の文化との類似性を見出せるかによって、理解の程度が異なってくる。宮崎アニメのように国境を越えてグローバル化された作品を受け入れる時、すなわちローカル化される時には、必ず違和感が持たれる。しかし、その違和感の中に少しでも共感できる要素を含んでいれば、観客は作品を理解しやすくなるし、また、その共感できる部分が、決して揺るがない物語の核の部分であれば、それによって語らせる力も出てくると著者はまとめている。

II 最終試験の結果報告

本論文は、宮崎監督が制作したアニメ作品の日本とアメリカ、台湾という3つの地域における受容の違いを比較文化的に研究しようとする壮大なテーマに取り組んだ成果である。宮崎駿監督に関する数多くの文献資料を収集し読み込んだだけでなく、宮崎作品、とくに『千と千尋の神隠し』のオリジナル版とアメリカ版（英語吹き替え版）、台湾版（中国語吹き替え版）のテキストを詳細に比較、分析した結果をまとめた力作であることは、審査に当たった3人の審査委員がともに認める点である。さらに、宮崎作品を含めた日本の大衆文化の受容について、著者は台湾においてアンケート調査とインタビュー調査を実施し、オリジナルなデータに基づく論文となっている。一方、アメリカにおいて現地調査は実施していないが、その一次資料の不足を補うために、宮崎作品に対するアメリカの一般観客の反応をインターネット上に紹介されている数多くの映画レビューから明らかにしている。また、アメリカと台湾において、宮崎作品がいかにローカル化、すなわちそれぞれの地域の文化的背景に合わせた形で受容されたか、具体的なデータに基づき、十分に説得力のある議論を展開している。

上記の点で、博士論文に相応しい内容を備えた論文になっている。しかしながら、審査委員から次のような問題点も指摘された。第一に、ローカル化については明確になっているが、グローバル化という側面については理論的な検討が少し足りない点がある。第二に、アメリカと台湾における受容を上げているが、それぞれの地域における文化的背景について十分に踏み込んだ議論が繰り返されていないという点である。たとえば、本論文では、台湾と日本の歴史的な関係、また、アメリカの精神文化を貫くマニ教的「この世は悪と善の戦い」というアメリカ人が今なお強固に持つ勧善懲惡志向的世界観というテーマが十分に議論の対象となっていなか

った。ただし、本論文がアメリカまたは台湾を対象とした個別的な地域研究ではなく、日本も含めた比較文化論的な研究であることを考慮すれば、上記の点は今後の課題として著者が取り組むべき問題点である。

以上、取屋淳子氏が提出した学位審査論文「宮崎アニメのグローバル化——アメリカと台湾における受容の比較研究」に関し口頭試問を行い、その内容を様々な観点から審査した。その結果、われわれ審査委員一同は一致して、学位申請者取屋淳子氏に対して博士（比較文化学）の学位を授与するに十分な資格があると判定した。

2006年8月1日

主査 小池 誠

副査 Philip Billingsley

副査 藤森かよ子